



みながら、楽しみながら理解するのである。

もちろん、理解してから動作化すると
いう限定もありません。よくわからな
い

重ねてやのものに言葉いは現解する
むなど子どもの内面に関わる言葉は入つ
ていないのでないかと思います。

れて得られるものではなく、あくまでそ
の子自身によるものです。だからこそ、
力主としての主義には、理解、実

「これは、動作化を理解のための道具（理解できればよい）と位置づけるのではなく、やってみる、なつてみるなかで広がる世界を大事にしているからではないか」と思います。そこで広がる世界は、ほかの誰かに「こうしろ」「ああしろ」と言わ

を言つたり動作をしたりすること」。シンブルな定義で、この定義には「理解」「楽しむ」などの目標が入っていません。そ

ち（学級の先生たち）は禁欲的にこう定義しています。「絵本（紙芝居を含む）のなかに出てくる、動作をまねること、すじ」登場人物になつて話の筋にそつたことは

ですが、一番の中心になるのが「動作化」。物語を理解するためにも、より楽しむためにも動作化が重要なのです。

ゲループの子どもたち

この3人で『おだんごぱん』を読むことを想像した時、Cくんはキツネをうまく演じるだろうな、Aちゃんはむずかしそうだ：でもほかにもつとピッタリくる教材も見つかからず…。Aちゃんにも楽しめるところがあるだろう、と授業づくりをスタートしました。うまく逃げていたおだんごばんが、キツネにだまされる場

Cくんのグループです。Aちゃんは言葉やお話の理解が一番むずかしく、それまでも初めての絵本などでは集中が途切れることがありました。Bちゃんはむずかしい言葉をたくさん知っていて、知的な遅れも大きくなかったのですが、お話を読む時に注目するポイントが独特な子でした。Cくんは他者の意図も読めるし、ことばも柔軟に使うことができ、それまでの授業でもCくんに助けられることがあつたそうです。

グループの子どもたち
グループの子どもたちは、お話を聞いて自分の言葉で説明することがむずかしく、動作化して理解できることが多くあります。5年生で自閉症のAちゃんとBちゃん、4年生でADHD傾向がある

面は、お話の転換点で重要です。しかも

動作化で大事なこと

人公になることについて考えます。課題別にグループ編成される「ことば」の授業のなかでとりくまれたものです。

「おだんごぱん」は、粉箱に残った粉をかき集めて作られた丸いぱん。食べられまいと、作ってくれたおばあさんからコロコロ転がって逃げ出します。途中で「たべてあげよう」と言うウサギ、オオカミ、クマに会いますが、「♪ぼくはてんかのおだんごぱん♪」というリズムの良い歌で相手の隙を誘います。歌にうつとりさせて逃げ出すのです。しかし最後に、言葉たくみなキツネに歌のうまさをおだてられ、近寄せられて食べられてしまふ…というお話をです。逃げ出すスリル、かけひきのおもしろさがあります。

ねがい ひろがる 教育実践

神戸大学
川地亜弥子

かわじ あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでですか？—発達障害からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第8回 やってみる、なってみる